

たろいばな 京都大学女性研究者支援センター Center for Women Researchers

夏休み キッズ サイエンススクール

8月16日(月)から20日(金)の5日間、「夏休みキッズサイエンススクール」を開催しました。女性研究者が研究・教育に十分な時間がとれるように、また、子どもたちが自然科学に興味を持ってくれるようにと、毎年、小学校の夏休み期間に開催しています。今回で4年目を迎える企画ですが、毎年、非常にたくさんの応募があり、抽選で各日12名の参加者を決めました。参加者は小学校1年生から3年生の子どもたちで、午前は保育士による工作など、午後はいろいろな分野の先生による科学教室に取組みました。

<1日目>

スクールは、稲葉センター長の挨拶で始まりしました。そして、先生の紹介、子どもたちの自己紹介を行いました。少し緊張した顔で、女性研究者支援センターに集まった子どもたちですが、自己紹介つきのジャンケンゲームで、お友だちの名前をしっかりと覚え、すぐに仲良くなりました。



さて、今日の午前のお組目は、日記の表紙づくりです。材料のモールが大人気で、力作が勢ぞろいしました。完成する時間は様々だったので、早くできた子は、片付けをしてトランプ遊びを始めました。



お弁当の後は、「55円でんちであそぼう!」の科学教室です。大阪工業大学の伊佐 弘先生より、かみなりや静電気の話聞いた後、「55円でんち」の実験をしました。電池に使うお金と紙の段数を変えたり、いろいろな電解液を試してみたりと実験を楽しみました。みんなのLEDが点灯して、大喜びでした。



<2日目>

1日目よりも緊張が少なく、みんなが集まるまでワイワイと雑談する子どもたちでした。「大文字見た?」など、すっかり打ち解けていました。午前のお組目は、「お化け屋敷あそび」です。おばけの話を聞いて、雰囲気盛り上げ、お化けのお面づくりに取り組みました。

自分の作ったお面に「こわい」という声を上げながらも、満足な様子の子もたちでした。そこで次は、どうやってお化け屋敷を作るかの相談をしました。たくさんのアイデアが出て、グループごとに役割を決めて作っていくことになりました。暗くする係、道を作る係、仕掛けを作る係に分かれ、どんどん作っていきました。



午後は、理学部附属花山天文台での「たいようをみよう」の体験でした。宇宙天文学研究ユニットの磯部 洋明先生、浅井 歩先生、院生の方々に教えていただき、太陽館の望遠鏡をのぞいたり、分光器で虹を見ました。院生の方に手伝ってもらい、高い梯子を上って、望遠鏡をのぞく体験では、スリルとお兄さん、お姉さんになった気分を満喫し、大喜びでした。見学のアとは、スペースシャトル型紙飛行機のプレゼントもいただきました。



ワクワク ドキドキ の 5日間



< 3 日目 >

朝から元気いっぱいの子もたちなので、みんなで体操をしました。体を動かして、すっきりとした後は、お絵かきに取り組めました。グループに分かれて、未来を想像しながら、つなぎ絵を完成させました。



午後は、吉田南1号館にて、「りったいえいぞうをたいかんしょう」の科学教室に参加しました。高等教育研究開発推進センターの小山田 耕二先生、坂本 尚久先生、工学部・工学研究科の学生の方々に教えていただき、ダンボールを使って、各自が3Dメガネを作成し、立体映像を楽しみました。顔にダンボールをあて、目と鼻の位置を確認した自分サイズのお手製3Dメガネは、みんなとても気に入って、はずすのが残念な様子でした。

その後、場所を移動し、本物の3Dメガネを使って、大スクリーンで立体映像を体感しました。映像に手を伸ばし、スクリーンにぶつかりそうになる子どもも出るほ



ど、大はしゃぎでした。

< 4 日目 >

午前の取組みは、「お店やさんごっこ」です。はじめにグループに分かれて、何のお店にするかを相談しました。本屋さん、くだもの屋さんなど各グループの店が決まり、さっそく、商品づくりにとりかかりました。力作揃いの商品ができたなら、財布を作って、お互いのお店で買い物を楽しみました。あまりに素敵な商品ばかりで、どれを買おうか、迷っていました。



午後の科学教室は、叡山電鉄株式会社様のご協力をいただき、「てつどうのおしごと」のテーマで活動しました。叡山電鉄に乗って、修学院車庫に伺いました。洗車機に入って、電車の中から洗車の状況を見たり、レールの説明や切断のデモをしていただいたり、列車を下から見せていただくなど、普段、できない体験をさせていただきました。運転手体験、車掌体験では、みんな楽しそうに、その役割になりきっていました。そして、おみやげには、切断したレールや、電車の模型作りの用紙をいただいて帰ってきました。暑い中、たくさんの職員の方々に教えていただきました。叡山電鉄の皆様、ありがとうございました。



< 5 日目 >

みんなが集まるまで自由に遊んだ後、「だれの家だろう」のテーマで、しかけ絵作成に取り組めました。教えてもらったしかけ以外にも、自分で工夫しながら完成させ、

午前は みんな遊び

午後は 科学教室



一人ずつ、自分の作品を発表しました。

午後は、総合博物館へ行き、「こどもはくぶつかん」に参加しました。塩瀬 隆之先生の「京大光線」のお話に、ぐんぐんと引き込まれた子どもたちは、2 グループに分



かれて、博物館をまわりました。卓上型X線CT装置では、見たいものを決めて、見え方の実験をしました。また、X線展示室では、中が透けて見える画面に大喜びでした。

＜反省会＞

スクール終了後には、保護者に参加していただいて反省会を開き、貴重なご意見をいただきました。その中の一部を紹介します。

- ・プロの保育士さんが見てくれるので安心できる。
- ・子どもは、忙しい母親を見て研究者にマイナスのイメージを持っていたようだが、ここで、同じ年代の子どもと一緒に大学のスタッフや先生方を見たせいもあるのか、「研究者になるのもいい」と言いだしはじめた。
- ・講師を探すのが難しいとのことだが、もっと広い範囲で探しては。
- ・「サイエンススクール」だが、サイエンスにこだわらなくてよいと思う。
- ・ある種の社会実験とも言えるから、研究費を取得することも一案。
- ・研究となつて成果ばかりを追求するようになると却ってマイナス。このスクールは、よい組み立てができており、無理をせず、このままで長く続けていくことがよい。
- ・通常の学童保育とも、単なるサイエンススクールともちがう独自のもので、子どもも楽しんでいる。
- ・参加費を負担しても参加させたい。
- ・1週間といわず、もっと長くできないか。
- ・開催時期ももっと柔軟にできないものか。
- ・研究者として、お盆前後のこの時期の開催は有り難い。

たくさんの方のご協力を得て、スクールを開催することができました。ありがとうございました。

(担当：育児・介護支援ワーキンググループ)

第 20 回 全国病児保育研究大会に参加

7月18日・19日に東京ビッグサイトで開催された第20回全国病児保育研究大会に病児保育室より看護師1名・保育士1名が参加し、以下の発表を行ないました。

今大会で、京大病児保育室は、「京都大学女性研究者支援センター病児保育室 感染隔離室設置における対策

と問題点」という演題で、ポスター発表しました。会場では、多くの方々に興味を持っていただき、発表を聞いていただきました。

発表後、座長の山口まみ子先生（病児保育室シェ・モア〈世田谷区〉）からマスクの着用が困難な子どもの場合の感染制御についてのご質問や、刈谷豊田総合病院の看護部看護



師長の秋田厚子様からは、病児保育室立ち上げに向けて是非京都大学の病児保育室を見学したいとお話をいただきました。他にも多くの方から隔離室内の感染制御や清掃についてのご質問をいただき、隔離室管理については病児保育室共通の課題だと考えられます。

セミナーでは、帆足英一先生（ほあし子どものこころクリニック院長）の「おむつはずれとおねしょ対策」・二村昌樹先生（国立成育医療センター病院アレルギー科医員）の「アトピー性皮膚炎に対するスキンケア」を聴かせていただきました。

また、「病児保育における感染症への留意点」というテーマで岡部信彦先生（国立感染症研究所感染症情報センター長・医師）、犬飼恵子先生（エンゼル多摩・保育士）、藤城富美子先生（日本保育園保健協議会 常任理事・看護師）のお話を聴かせていただきました。

他の病児保育室の方々とも意見交換ができ、今後、病児保育室での保育・看護・感染予防にぜひ役立てていきたいと考えています。

(保育士 北原)

連載：研究者になる！－第26回－



転んでもタダでは起きるな
法学研究科・教授 高山 佳奈子

私の専門は刑事法学である。もともと、男女が平等に働ける職場への希望から、国家公務員Ⅰ種の受験を目指して東京大学文科Ⅰ類に入学した。当時はまだ女性のキャリア官僚が少なく、官庁はこれからの女性の採用・登用に意気込みを見せていた。しかし専門科目を学習するうち、刑法の理論研究への関心が強まった。ところが、刑事法大講座では女性の助手・院生が続けて研究をやめ、法律実務家に転身する事態が発生していた（私の後輩の女性もやめることとなる）。指導教官となる助教授は私を保護する立場にあったが、教授陣に私は全く歓迎されなかった。期待がかけられている国家公務員を目指すか、邪魔者扱いされる研究室に残るか。4年生の初夏まで迷った。だが、「自分を信じろ」という天の啓示があり、他の専門科目の教授らからの励ましもあって、研究者を目指すことにした。当時、毎年数名の成績優秀者が学部卒業と同時に助手に採用される制度があったが、私は採用されず、自分よりも成績の悪い人達が助手に採用されるのを尻目に、大学院に入学した。幸い実家に居住していたため生活に困ることはなかったが、当時はTAの制度もなかったので、家庭教師のアルバイトをしながら勉強に励んだ。さらに悪いことに、論文執筆中の助手が事務作業を免除されていたため、私は授業料を払って無給で学会事務などの仕事をした。

修士論文を提出し、助手に採用された直後に、もう就職の話があった。当時はバブル期の影響で地味な研究職を選ぶ者が少なく、その一方で定年退職を迎える教授が全国で多数出ていたため、著しい青田買いが起こっていた。助手の任期3年を終えて就職した先は成城大学法学部である。この学部は創設後まだ新しく、東大助手が就職した実績はなかった（私の後にもない）。少人数教育を本旨とする学校であるため規模が小さく、有力大学だとは到底いえない（現在も、法科大学院を設置していない）。しかし、スタッフの約4分の1が女性であり、その中には、のちに法制審議会会長となる鳥居淳子教授や、フランス憲法研究で著名な辻村みよ子教授などのセレブも含まれていた。人事の方針としては、女性を積極的に採用することも、排除することもなかった。法学専攻の大学院生や助手の4分の1が女性だとすると、自然に採

用すれば女性が4分の1になるはずであり、おそらくこれが差別のない状態での数字なのだろうと私は思った。他学部にも多くの女性教員がおり、快適な環境で教育・研究に従事できた。若手教員への支援も拡充されつつあり、先輩同僚らのサポートのおかげで、フンボルト財団の奨学金を得てケルン大学に留学することができた。

ところが、2年間の留学中に、京大への移籍が決まっていた。ドイツ語の習得に励んでいた私にとっては寝耳に水であり、ストレスで顔じゅうにおできができた。そのときまでに7年間交際していた男性がおり、すでに双方の両親にも会っていたが、帰国後に「破談」となった。直接のきっかけは、もともと遠距離恋愛の関係にあったものが私の京都赴任でさらに不便になること、また、社会的地位の逆転に危機感を持った彼が入籍を求めたのに対して、私が事実婚（夫婦別姓）を主張したことにある。別居で事実婚というのはほとんど実体がないから、彼にしてみればプロポーズを断られたにすぎないことになるだろう。彼はほどなく勤務地の地元の女性と結婚した。

しかし、これは、自分の実績が評価されて得た初めての地位である。帰国2年後の2002年4月に着任してからは、まだまだ課題を残すものの、順調に教育・研究生活を送ることができている。私大にいたため助教授への昇任が京大の生え抜きの人に比べて6年遅れていたが、教授昇任の段階で追いつくことができた。学外では、2004年に日本人として初めて国際刑法学会本部執行役員に選出された。アジアの女性研究者が稀少であったために抜擢されたのだ。2006年にはドイツの勲章もいただいた。若手女性に期待する趣旨が込められていた。2009年には女性として初めて日本刑法学会理事に選出された。ここでも同世代の男性に遅れをとることはなかった。

私の研究領域は基礎理論なので、女性の視点といったものを生かす余地はあまりない。それとの関連でいつも思い出すのが、院生・助手時代にご指導くださった元東大総長の故・平野龍一先生（当時は名誉教授）の次のようなお励ましである。「鼻柱の強い論文をお書きなさい。著者が女性だというだけで、軽く見られてしまうからね。」かつては、女性の書く論文は射程の小さい（ゆえに被引用回数の少ない）ものが多いと見られていた。現在ではそのような偏見は減少し、就職差別やハラスメントの状況も徐々に改善されつつある。今後ひとりでも多くの女性が研究者になり、これを押し進めてくれることを切に願う。

Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>